木琴奏者の不屈の精神つづる

第一人者 平岡養一の生涯、本に

京都市在住のマリンバ・木琴奏者の通崎睦美さんが、木琴奏者の第一人者平岡養一（1907～81年）の生涯をつづった評伝「木琴デイズ」（講談社）＝写真＝を出版した。アメリカを拠点に国際的な音楽家として人気を博した平岡だが、今ではそれを知る人は少ない。通崎さんは「木琴という楽器も、平岡さんの人生も、書いておかなければ忘れられてしまうという思いでつづった」と話す。

独学で木琴を習得した平岡は、慶応大卒業後に単身〝木琴王国〟アメリカへ。放送局NBCの専属として朝の15分番組を担当し、日米開戦までの10年9カ月間、毎日生演奏した。42年に日米交換船で帰国し、戦後は日本でも国民的演奏家として人気を呼んだ。

京在住のマリンバ・木琴奏者
通崎睦美さん

通崎さんは2005年、平岡が使った木琴で演奏した。これがきっかけで遺族から楽器や楽譜を譲り受け、資料を整理するうち、平岡と木琴について記録に残す必要性を痛感したという。

古い家や着物が好きな通崎さん。「木琴も着物も長屋も、預かっているという感じ。次の世代につなぐまで、色をつけていけたらと思う」（京都市下京区）＝撮影・船越正宏

「ノンフィクション作家が書いてくれないかと思っていましたが、誰も書いてくれそうにないことが分かった。バイオリンは何百年にも渡って引き継がれていきますが、木琴にはその文化がない。平岡さんを知る人が生きている間に、私が書こうと思いました」

通崎さんは平岡の人生だけでなく、日米の音楽事情や政治的背景も視野に入れて資料を読み込んだ。レコードも集めて一枚一枚丹念に聞き、3年をかけて執筆した。

著書では、平岡の知られざる苦労にも焦点を当てた。渡米した当時は木琴の人気に陰りが出ていて、すぐには仕事にありつけなかったこと。独学によって付いた演奏の癖を、苦心して直したこと。晩年はタンゴなどに取り組んで大衆に寄り添おうとしたが、マリンバに人気をさらわれてしまったこと。

順風満帆では決してなかったが、平岡の木琴への思いは終始、揺るがなかった。その不屈の精神を支えたものは何だったのか。同じ演奏者として通崎さんは「木琴が好きでたまらないという思い」だったと考える。

「魂を奪われているというのか、食べなければ生きていけないのと同じぐらい、平岡さんは木琴を弾かないと生きていけなかったのだと思う。書いていて『それは才能だ』と気付かされました」

今とは違い、渡米に相当な覚悟が必要だった時代を生きた平岡。「体が弱く、手が小さいなどのハンディがありましたが、平岡さんには揺るぎがない。自分を信じ、信念に忠実で、出合ったチャンスも逃さなかった。そんな姿を現代の人に知ってほしい」

◇

19日午後3時から京都市上京区の府民ホール・アルティで開くリサイタル「木琴文庫」で、平岡さんの木琴を演奏する。有料。オトノワ☎075(252)8255。

（行司千絵）